

ハ最ムツカシ、常修院殿ノ、瓢ノ花生ヲキリテ下サレシ時ニ、是等ナド八九月ニヨキモノナリ、秋ノ艸花ナド入テ面白シ、フクベナレバ、炭取ニサシアイテ冬ハ出サレズ、水ノナラヌモノナレバ、風爐ニモ出シガタシト仰ラル、

〔茶道聞書集^甲〕或處へ爐の名殘の茶に參り申候時、殊の外ほかくと致し候、香合に薰物白檀と二品入出、流芳ほめ被申候、

暖氣の節、薰物あしらい定りたる事にはあらねども、心得有べし、爐の名殘といふ事、他流にはあれども、當流には用ひず、名殘は風爐ばかり也、

〔和泉草^二〕口切ノ時分ヲ知事

一口切ノ時分考知ハ、二霜三霜降テ後、青霜已前ニ壺ノ口切レバ茶損ズル也、

〔茶式花月集^二〕一茶湯當日口切

竹バカリニテ木ノウケ、筒ハナシ、庭ニ大木アラバツタハセ可申候、

樋或ハ戸押縁ナド、所々見合、青竹ニ改ル、チリ箸、サイ箸、蓋置、灰吹、青竹ニ改ル、所々戸留リ、青

竹ニ改ル、路次ニ松葉ヲ敷、但シシキヤウ前ニ記、手水鉢柄杓、内外トモ新ニ改ル、路次水ヲ

打、塵穴ニ青葉ヲ入、竹箸付置、青竹ニ改ル

〔南方錄^二〕壺口切之會、火相之事、香出す事、茶の服心用之事、茶入心用之事、

初入掛物かけて前に壺かざるべし、草庵體の口切は火相を心得べし、火を強すべし、客座入あらば主出て一禮濟、早々挨拶して壺をさばき、壺を客より請て見る事勿論也、口切の時は大方はだか壺に口緒口覆まで可然、口緒も半切のたやすきが能也、手ばやにさばく事本意也、見物濟て道具疊に直し、封をさらりとまゐるし計に切て勝手へ持入る、封の切様前の印より小刀をはじめ、三刀に切事口傳有、壺室のふたを出して見する事有、凡夫にも不及、香爐杯出して、待遠になきはたらきすべし、主は茶批判してひかする、扱程を見合せ、炭をして懷石を出す也、中立等別儀なし、總